

2020年5月31日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「聖霊のうめき、社会のうめき」

聖書：ローマの信徒への手紙8：18～30

今日は、ペンテコステ(聖霊降臨日)。教会の始まりを覚える日。聖霊は、新約(ギリシア語)では「プネウマ」、旧約(ヘブライ語)では、「ルーアハ」。それは聖霊以外に「風」、「息」という意味にもなる。ヨハネ福音書 3 章 8 節に「風は思いのままに吹く」という箇所があるが、その風はプネウマが使われている。聖霊は風のようなものという。よく譬えられるのが、凧揚げの時に凧は風を受けなければ空を舞うことができない。教会も聖霊の働きがなければ広がることはない。また、聖霊の働きがあるからこそ私たちは教会に導かれて行く。ただ教会に行っていないから、聖霊の働きが無いとか、神に愛されていないということでは勿論ない。創世記 2 章 7 節に「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とある。この息は「ルーアハ」が使われている。私たち一人ひとり、神の命の息を吹き入れられているのである。私たち一人一人に、神の霊が居てくださっているということである。

今朝の箇所は「いのちの呻き」について記している。パウロは「命」についてフィリピの手紙で「キリストは私の命である」と言い、またコロサイの手紙では「あなたがたの命であるキリスト」という表現もある。そして福音書にイエスご自身が「わたしは復活であり、命である」と宣言する。すなわち、命は全てイエス・キリストに通ずるということであり、私の命の中にキリストが居られ、私の命はキリストの命であるということである。さらに動物や木々、草花も全てはキリストの命に通ずるということである。

ここには三つの「いのちの呻き」が記されている。「被造物の呻き」(19-22)、「私たち(キリスト者)の呻き」(23-25)、「霊の呻き」(26-27)。これらの呻きは何を意味するのか？この世に生きることは呻きを伴うことである。逆に、呻きを伴わない生き方は、命に向き合わない歩みをしているのではないか。他者の命にも、自分の命にも向き合わない歩みをしているのではないか。私たちの呻きは聞かれているのである。私たちが祈れない時、聖霊は、私たちの呻きや嘆きと一体となって、私たちを執り成してくださる。ゆえに、私たちの中に「うめき」があることこそ希望のしるしである。

今日、私たちが被造物の「うめき」に、社会の「うめき」に共感することは、聖霊を経験することになることを、教えられたい。私たちはこれまで何度も聖霊を経験しているのであり、これからも共に「聖霊のうめき」に、「社会のうめき」に向き合い、歩んで行こう。(神谷)